

## 妻に贈られた花

田井中 治一郎 滋賀県東近江市 六十五歳

二十年前の五月、小学生だった息子が自転車で帰ってきた。赤やピンクのカーネーションが詰まった鉢植えを前カゴに入れて。

「お母さん、いつもありがとうございます」つま先立ちで止まったまま、庭先で花の手入れをする妻に手渡し、話しかける。「まるで、母と子のきずなを描くドラマの一場面のよう。大ざっぱな性格やけど、母親を思う優しいところがあるんやなあ」近くで水やりをしていた私は、ほほえましく思った。妻は、幼いころ重い心臓の病気を患った息子の成長をたのしく感じたという。同時に「少ない小遣いで、こんな豪華な花を買ってくれるなんて……。毎月こつこつ、ためてくれたのかもしれない」などと想像し、うれしかったらしい。

妻は後日、近所にある花屋へ出かける。そこで偶然、息子がくれた鉢植えと同じのを見つけた。値札を見て「やっぱり高かったんや」と声を上げる。すると、店の主人が振り返って言ったという。「先日、同じ花を買ってくれたのはお宅のお子さんでしたか……。何度も鉢植えに目をやり、財布の中をのぞき込みながら長いこと考えてましたわ。お母さんを思う気持ちに胸を打たれてサービスさせてもらったんですよ——。

梅雨入り前のさわやかな日、息子の結婚式だった。「お母さん、今までありがとうございます」そっと花束を渡す。妻は涙ぐみ、私も思わず目頭を熱くした。